

自律性・関係性・有能観を高める生活科の理論と実践に関する研究 —自己評価カードを用いた指導を通して—

小野間正巳
関西福祉大学

低学年の子どもにとっても自己評価は、体験したことを自分なりの規準とペースで活動内容や活動方法、態度・意欲を振り返り、確かめ調整をしているといえる。しかし、活動を継続し成し遂げた段階で、自分のよさや成長に気づき、自分自身への気づき、それをどのように深めていくかについての評価の観点や評価方法については明らかにされていない。生活科において、気付きの質を深めることができる自己評価の方法について評価の観点や方法・工夫を設定し、実践を通して検証し明らかにしたいと考え本課題を設定した。自己評価カードに書き表された記述内容と学習展開のそれぞれの段階とを対比させた「評価規準と支援方法」を作成し、これを手がかりとして、子どもの活動に対する言葉かけなどの支援に生かした。さらに、相互評価を加えることで、自己評価の「確認」と「調整」がより一層機能し、子どもの自律的な学習が展開されるとともに、子ども同士が関係し合うことで、学習に対する自信にもつながった。このように、工夫された自己評価カードを用いることで、生活科学習における自律性・関係性・有能観を高める指導が期待できる。

[キーワード] 評価活動・自己評価・自律性・関係性・有能観

1 問題の所在と課題

知識基盤社会、少子高齢社会、核家族社会、IT社会と言われ、地域との連帯感の希薄、事象とかかわる直接体験の機会の減少、情報の氾濫と価値ある情報の判断が難しい時代である。社会の変化に対応するような知識や技術などの応急手当的なものを求めるだけでは、十分ではなく、自然や文化とふれ合ったり、かかわり合ったりする経験を積み重ねていくことで、新しい自分なりの知を更新していき、自らの意志で学びに取り組むことで、自分を成長させて生きていく生き方が大切であると考えます。

そこで、子ども自らが感じることを大切にしていくことで、感じたことを自覚させ、自分の思いや考えをもち、子どもがもった思いや考えから自分で追究したい課題を決め、自分で課題を解決する力が身に付く。そして、子どもは、自分の学びに責任をもつようになり、自律性が育まれていく。さらに、仲間から影響を受け、自分の思いや考えが変化したり、深まったりすることで、より考えを確かなものにしていく。（小野間・板倉、2013）

さらに、自分自身の課題を粘り強く追究

し、解決することができたときに満足感を感じ、自分の有能さを感じるようになり、自己肯定感を味わうことができる。

こうして、変化する社会に対応し、自らの意思で学習に取り組むことができるようになる。このような学習において、自らの学習を振り返ることによって、学習したことの確認やこれから進めていこうとする学習の調整をしていくことができる。このような自己評価活動を行うことで、自らの活動を振り返り、活動の成果や学んだことの確認、今後の活動や見通しなどの学習や活動に対する主体的で、自主的な取り組みに効果的であり、これまでも多くの実践を通して、その有効性が指摘されている。例えば、静岡大学教育学部附属浜松小学校の実践報告では、次のような成果を上げている。「新しい知識や技能を得ながら、自分なりの意欲・意志、思考力、自己表現力を身に付けることや身に付けた力から今後の自分の態度や学習内容に対する自分なりの考え方を持つことができるようになった。」（静岡大学教育学部附属浜松小学校、1995）

この自己評価について、安彦は、「意識的なフィードバックを通して行動を修正する

ためであり、調整能力・論理的調整能力・統合能力・統制能力・内省能力などの全てにわたって働き、その全体を通して、複合的に、子ども自身の『自己統制能力』をつくり出し、育成している。」と定義し、その有効性を指摘している。(安彦, 1989) このように自己評価が、自らが活動を振り返りながら今の自分を確かめ、次はどのようにしたらよいかを調整し、新しい方法を見出して見通しをもって解決に向けた活動を進めることができる力であることは、低学年の子どもにとっても自己評価は、体験したことを自分なりの規準とペースで活動内容や活動方法、態度・意欲を振り返り、確かめ調整をしているといえる。

しかし、活動を継続し成し遂げた段階で、自分のよさや成長に気づき、自分自身への気づき、自己評価の観点や評価方法については明らかにされていない。また、これまでの実践から、「確認」「調整」する言葉と自分の気持ちを表す言葉は別々に書かれるのではなく、一つの文中に表現されていることが多いことが明らかとなっていることをふまえ、学習段階に応じた気づきの質が深まっている場合の表現を整理し、評価尺度として教師の支援に生かすことが可能となると考える。

そこで、自己評価の観点や評価方法及び自己評価の文中表現の学習段階ごとの評価尺度について、これまでの実践を通して検証し、学習に対する支援に有効な評価尺度の作成を目指し、本課題を設定した。

2 研究内容と方法

(1) 研究内容

低学年の子ども自身に自らの活動に対して責任を持ち、主体的に取り組み、学習に対する意欲を持たせるなどの自律性を高めるためには、まず、教師の働きかけが必要である。そこで、「発達段階をふまえた活動の重点化」「発達段階をふまえた自己評価の方法」「自己評価の観点を設ける」「活動後における自己評価の方法と工夫」などが考えられる。そして、生活科学学習をより学びがいのある教科とするために、これら4つの方法を取り入れ、子ども一人一人の自己評価を生かした活動展開とすることで、子どもにとって活動が明確化され、主体的に取り組める生活科学学習が可能となると考える。

そこで、自己評価カードに書き表された記述内容と学習展開のそれぞれの段階とを対

比させた「評価規準と支援方法」を作成し、それに基づいて支援をすることで、子どもの活動を促すだけでなく、振り返りによる意識の変容を見届けた。その際に、一人一人の子どもの活動に対する意欲を文章表記から読み取り「自律性・関係性・有能観」と関わらせて記録する。このような教師の働きかけによって、子どもの自己評価の変容を学習過程に対応させて「自己評価モデル」を作成する。

(2) 研究方法

ア 発達段階をふまえた自己評価の方法を取り入れる

低学年児童の心身の発達を考えると、1年の始めと2年生の終わりでは、ずいぶんと異なった活動の表れをする。そこで、子どもの興味・関心や願いを大切にしながらも、発達段階(モーリス・ドベス, 1982)(加納, 1997)に応じた自己評価方法を取り入れる。

I 入門期(入学～1年生前半)

好奇心が旺盛で、様々なことに興味を示す。物事をまだ分化されていない全体として知覚する。目・耳・手など身体で考えるといい。学習が生活と同じ意味をもち、生活も大半は遊びが占めている。学習=遊びのレベルといえる。

◇文章表現がまだ十分にできないので記述式ではない方法で、自己評価をさせる

- ・絵や作品
- ・教師との会話
- ・発言・簡単な評価カード

図1 絵と簡単な文で書くカード

II 充実期 (1 年前半～2 年始)

自己中心的な外界把握の傾向は残っているものの、次第に他の存在を対象化してとらえるようになり、多様な体験に取り組み活動内容も手段的なものが可能になる。非常に活動的で、实际的な活動に興味をもち、頭で考えたことを自分なりの方法で追求する活動に取り組み、自分の力で実現する満足感を求める時期である。

- ◇ 自己評価の方法としては、自由記述が望ましいがいきなりでは無理なのでいくつかの質問項目を用意したり、評価尺度法と併用したりして、徐々に自由記述法に移行させていく。
- ◇ 自由記述を進める場合、評価の観点をはっきりさせて記述できるようにさせるために、始めはいくつかの観点の中から選択させる。最終的には、自分で観点を決めて記述できるようにしたり、友達や家族からの言葉欄を加えたりする。
 - ・評価尺度法
 - ・自由記述法
 - ・質問紙法

どうぶつをそだてよう

月 日 ねん ぐみ

・どうぶつとしなごう

・むねのしかたは () よくできた () もうすこし () がんばりたい

図2 自由記述のカード

III 移行期 (2 年始～2 年終)

自分ができるようになったことや自分の役割が増えたことに気付くなど、自分の身の周りの出来事を客観的に見ることができるようになる。また、友達のできるようになった

たことや友達のよい点に気づき、指摘したり
助言したりできるといった客観的見方・考
え方が訂正きるようになる。

- ◇自己評価の方法として自由記述によることを多く取り入れる。また、評価項目も自分の活動に応じて設定するようにさせる。また、友達や家族からの言葉欄を加え、相互評価もできるようにした。
- ・評定尺度法
 - ・自由記述法

イ 自己評価の観点を設ける

子どもは、対象に対して夢中で取り組んだ後、自分を対象化し自己評価することにより自分の姿が見えてくる。特に、つまずいたり戸惑ったり失敗したりしたときや十分に満足できる活動を終わったときなどに、自己評価した内容は深まる。そこで、子どもが自分の姿を自己評価していく観点として以下の2点をおさえ、助言などにより意識的な子どもの自己評価を促していった。

①自分自身の活動への参加状況

どのように活動してきたのか、その態度や意欲、関心について振り返る。

②活動内容にかかわる自分自身の向上・成長の状況やできるようになったことや分かるようになったことなどの変容を振り返る。

※これらは、子どもにとってはっきりと区別してとらえられるものではなく互いにかかわり合って意識されるものである。

[illegible]

図 3 自分自身の活動への参加状況活動や内容にかかわる自分自身の向上・成長の状況が書けるカード

ウ 活動後における自己評価の方法と工夫する

単位時間の活動後においては主に自分の活動内容や方法、意欲・態度・気持ちについて振り返らせ、次の活動への見通しやめあてをもたせる。小単元の活動後や単元全体の活動後においては、主に自分のよさや成長に気づかせ、満足感や成就感をもたせる。さらに、学校の様子を家庭に知らせ家庭での学習の広がりや深まりの様子を伝えてもらうことで、子どもへの励ましや助言などの支援に生かす。

また、こうした自己評価が、低学年でも意識してできるように、子どもの発達段階に合った自己評価の方法を取り入れる。

エ 学習過程と連動させる

学習活動は、おおよそ「導入」「展開」「終末」の過程によって学習が進められていく。こうした学習過程によって子どもの自己評価の表現が変わってくるのが考えられる。そこで、それぞれの過程における表現を整理して一覧にすることで一人一人の学習の深まりや広がりをつかみ、支援に生かすことができると考え、つぎのような学習過程によることとした。支援を有効とするために、評価基準表（小野間、1993）を基に、「評価規準と支援方法」を作成して支援に活用した。

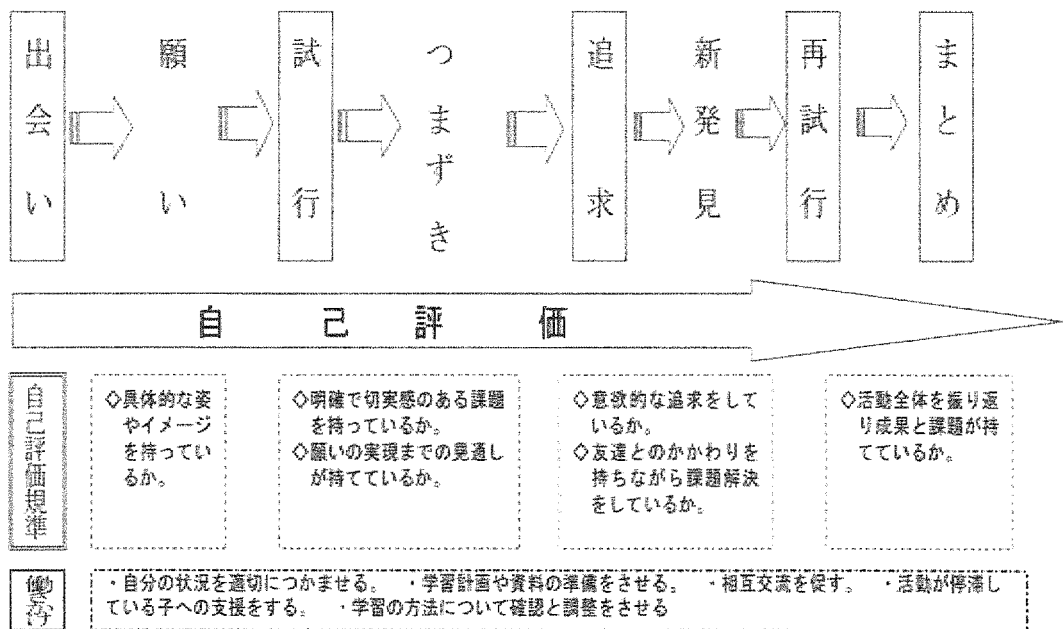


図4 評価規準と支援方法

3 実践事例

(1) 1年生前半

《単元名》「なかよしたんけんたい」

なかよくろう 13 時間

①ゲームをしよう ②自分を紹介しよう

③2年生と遊ぼう ④鬼ごっこをしよう

⑤名刺をつくろう ⑥友達をつくろう

附属小絵本を作ろう 22 時間

①探検してみよう ②探検の準備をしよう

③教室を探検しよう ④校舎の外を探検しよう

⑤学校絵本を作ろう

遊び場案内を作ろう 11 時間

①天神の森へ行こう ②遊び場を探そう

③遊び場案内を作ろう

先生ありがとう 15 時間

①働いている先生をみつけよう

②手紙を書こう

〇〇小を紹介しよう 5 時間

①家の人や幼稚園の先生・友達に知らせよう

《自己評価のおさえ》

自己評価は、主に絵を主体として、文の混じった学習カードの利用をした。活動中において、教師は、個々の子どもの活動について質問や共感的な言葉かけをすることにより、子どもの振り返り

を促し、気づきを深め、子どもが自分の取り組み
 方のよさに気づいたり、
 効力感をもったりするよ
 うな支援をすることで、
 自分の活動に対する取り
 組みを意識させた。

《小単元；「どんな部屋があるかな」でのS男の
自己評価例》

本小单元では、自分が探検して分かったことをカードに絵や文で書き、そのカードを見て教師が助言をすることにより、様々な角度から探検での気づきが深まるようにした。S 男は、はじめに理

体育館；せんせいぼくは、たいいくかんをみつけました。5ねんせいやたくさんのしょうがくせい、たのしいたいいくをしていました。

理科室前；ぼくは、いいものをみつけました。それは、おそろしいものでした。それは、つくりもののにんげんでした。

多目的；ぐらんどびあのがあった。とけいも
あったホール まいくもあった。びでおもあ
りました。ちずもありました。てれびもたく
さんありました。

保健室；くすりのにおいがたくさんにおいま
した。てれびもありました。それに、せんせ
いがくすりをせいとんしていました。
音楽室；いろいろながつきがあつて、あんさ
んぶるができそうです。それに、4の1くみ
のみんながうたっていました。

科室を探検し、次のようにカードに書いた。

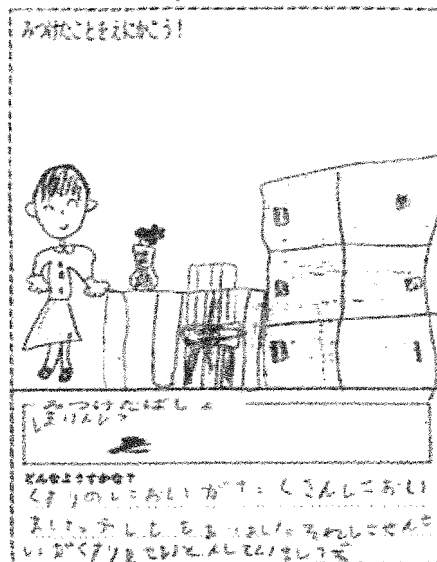
その後、S 男は、『体育館』『理科室前廊下』『多目的ホール』などを探検し、見てきたことを次のように書いた。

S 男のカードには、その部屋にあるものが主に書かれていた。S 男は、その部屋にあるものに着目して、探検していたのである。教師は、それぞれの部屋の設備・備品だけでなく、部屋の役割にも気づいてほしいと考え、「この部屋は何するところかな。」と助言をした。

この助言の後、S 男は、部屋に置いてあるものばかりでなく、その部屋の雰囲気や、その部屋を使っている人たちについても観察できるようになってきた。

そして、カードへの記入内容が次のように変わってきた。

1わん|くら(S O)



理科室；せんせいぼくはりかしつをみつけました。きつねやいろいろなどのどぶつがいいました。それにどうぶつのいろいろなしゅるいがありました。

図5 S男の自己評価カード

(2) 1年生後半から2生前半の事例

《单元名》「とっておきの春を見つけよう」

学校内の春を見つけよう 8 時間

①1年生と一緒に春を見つけよう

②自分たちだけで春を見つけよう

③見つけた春を紹介しよう

④見つけた春を地図に書こう

学校の周りの春を見つけよう 6時間

①春を見つけに行く計画をたてよう

②春見つけに出かけよう

③見つけた春を紹介しよう

お気に入りの春を見つけよう

①いろいろな春を見つけよう

②お気に入りの春を紹介しよう

《自己評価のおさえ》

自己評価は、主に絵と文が混じるが、文を書くことを意識させた学習カードと文だけの学習カード²を利用した。2種類のカードには『活動の様子
の振り返り』『活動についての感想』『次にしたい活動』『友達から』の欄を設け記入させた

活動中において、教師は、個々の子の活動について共感的な言葉かけをすることにより、子どもの振り返りを促し、子どもが自分の取り組み方のよさに気づき、効力感がもてる支援をし、自分の活動に対する取り組みを意識させた。

《小単元：「天神の森には、春がいっぱい」でのM子の自己評価例》

前庭や動物村での春見つけをしたM子やその他の子どもたちは、やがて天神の森へと出かけて行った。天神の森には、1年生の秋にまいた小麦が80cmほどの大きさに育っているだけでなく、タケノコ、タンポポ、オオイヌノフグリ、フキノトウなどが見られる。天神の森へ出かけた子どもたちは、思い思いにそれらを見つけては、採取したり、絵を図6のようにカードに描いたりした。

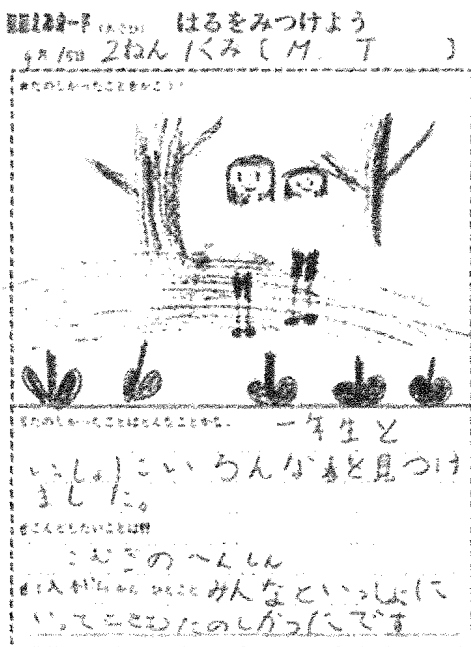


図6 M子の自己評価カード1

M子は、天神の森で、タンポポを摘んだり、タケノコを見つけて掘ったりしたが、これらが気に入ったようで、タンポポをたくさん摘んでは、花飾りを作ったり、タケノコをもっと見つけようと探したりしていた。教師は、見つけたことだけでなく、困っていることや次にしたいことも書いてみると相談に乗れることを助言した。

この助言を聞いてM子は、活動について次のように学習カードに書いた。

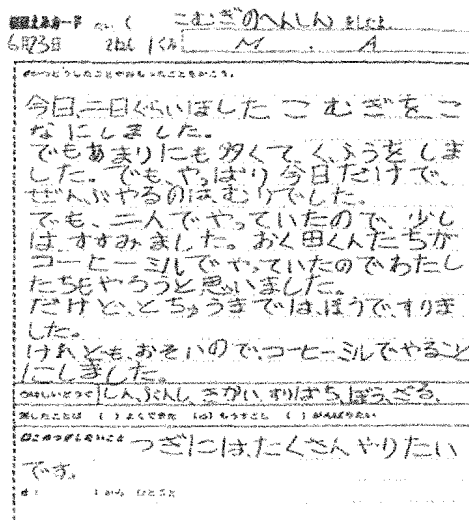


図7 M子の自己評価カード2

M子は、自分の活動の振り返りを、見つけたことから考えられる活動をいろいろと考え、自分なりの思いをもとにこれからの活動を見通すことで、次の活動への意欲を高めることができた。

(3) 2年生後半の事例

《単元名》「ぼく わたしの パンをつくろう」

※1年生11月~2年生6月

麦をまこう4時間

①蒔く畑を耕やす②小麦の種を蒔く

麦さん大きくなったね5時間

①小麦の芽を観察する ②成長の様子を観察する

③肥料をまく ④下草を取る ⑤かかしを作る、防鳥網を張る

麦刈りをしよう7時間

①麦刈りをする ②小麦を干す ③実を取り出す

④実と殻を分ける

小麦を粉にしよう8時間

①小麦粉の作り方を調べ道具を用意する ②実から粉にする

パンをつくろう6時間

①パンの作り方を調べ道具を用意しパンを作る

②パンを食べる

パンができるまで11時間

①パンができるまでを表す。

《自己評価のおさえ》

自己評価は、「作文欄」「活動の振り返り欄」「次の活動への見通し欄」「相互評価

活動中において、教師は、一人一人の子どもとかわり、活動についての質問・助言をしたり、共感的な言葉かけをしたりした。その結果、子どもの振り返りを促し、気づきを深めたり、子どもが自分の取り組み方のよさに気づいたり、効力感をもったりするような支援をし、自分の活動に対する取り組みを意識させた。

脱穀した小麦を粉にするために『ミキサー』『コーヒーマル』『すりばち』『ビンとう』などを使って粉作りに取り組んだ。『ぼう』を使って粉をつくったM子は数粒ずつ棒で小麦をたたいて粉にしていたがなかなか思うようにはかどらなかった。次に、『すりばち』を使って、すり始めたが、それでもなかなかうまくはいかなかった。そこで、友達がどのようにして粉をほほえみカードつくっているかを見て回り、『コーヒーマル』を使って粉にしていることを知りその方法のよさに気づいた。そして、このことを学習カードに、次のように書いた。

図8 M子の自己評価カード3

すると共に自らの活動を見直し、修正・改善していくことにつながった。その結果、常に自己評価することで、取り組みを振り返りよりよい取り組みへと変えていくことができるようになった。

子どもは、自分の興味・関心をもとに願いをもって活動していく中で、つまずいたり、戸惑ったり、失敗したとき、自分の願いに照らし合わせて、その理由や原因を自分なりに振り返っている。そして、図9で示すように、振り返りながら今の自分を確かめ、次はどのようにしたらよいかを調整し、新しい方法を見出し、見通しをもって願いの実現へと向かって学習活動を進めていく。さらに、一つの活動が終わったときや願いが実現したときには、今まででできなかったことができるようになった自分や、知らなかったことに気づき分かるようになった自分を発見していくと考えられる。このように、低学年の子どもにとって自己評価とは、自分がどんな人間なのかを内省していくためのものではない。活動の中でいろいろ体験しながら、自分の活動内容や活動方法、態度・意欲を振り返り、確かめ調整していくことを大切に行われる。それは、自分の願いやめあて・これまでの生活経験をともに、自分なりの基準で自分の行動に合わせて、自分のペースで行うものである。そして、活動を継続し成し遂げた段階で、自分のよさや成長に気づき、自分自身への気づきを深めることができるようになると考えられる。

39

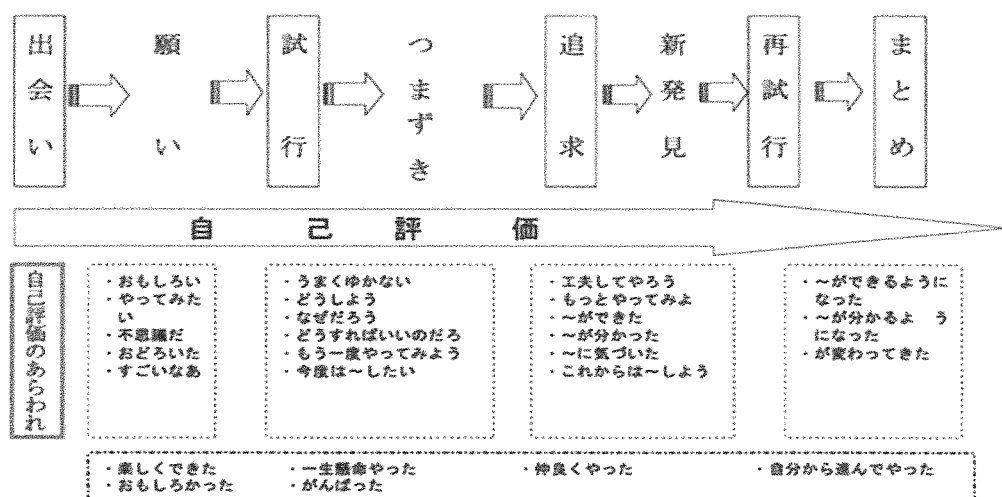


図 9 学習の流れと自己評価

また、自己評価を進めていく過程において、子どもは、「課題追究をして自分なりの考えを持てた時に、自分なりの確認と調整をする。」「友達と相互交流し、情報を交換する中で、独りよがり避け、自分の考えにより妥当性を持たせようと確認・調整の自己評価を行う。」「各課題追究の活動をまとめ表す時に、課題に対する自分の考えを最終確認し、次の時間には新しい課題追究に進むか、再度同じ課題追究に取り組むか調整する。」と自己評価にも学習の場面に対応した分類が可能である。

このように自己評価においては、常に「確認」と「調整」を繰り返すことで、自らの活動に客観性を持たせようとする。このことは、自分の考えについての根拠を示すことであり、その根拠をはっきりと持てることで自分の行動に対する意思が自覚できる。この意思の自覚によって子ども自身の自律性が高まる。また、自己評価は、相互評価を取り入れること補完でき、第三者の意見を得ることで「確認」と「調整」を行い自らの活動をよりよいものにしようとする改善が行われる。また、自ら活動のよさを認められることで自信が持て、達成感や有能観が高められる。また、相互評価により、第三者とのかかわりが生まれ、同じ環境の中でともに学び合うことが意識され、関係性が育つ。

このように自己評価・相互評価によって、自律性・関係性・有能観が高められ、生活科の学習のねらいの「自立への基礎」が育つ。

6 まとめ

自ら学習に取り組む子どもを育てるために、子どもにも自律性・関係性・有能観を高めることが必要である。工夫した自己評価カードと評価規準と支援方法表を取り入れることで次のような変容が見られた。まず、活動後の自己評価を取り入れていくことにより、自分の活動についての振り返りができるようになり、次の活動をより深めることができたのである。また、教師は、子どもや子どもの活動を自己評価の面からとらえることによって、子どもの活動を表面的にとらえるのではなく、個々の子供の内面まで掘り下げてとらえようとする深い見方をするようになった。さらに、子どもが主体的に活動に参加できるように、子ども自らのこれからしたいことを自己評価カードから読み取り、支援していくことにより、気づきを深めさせていくことができた。

こうした成果を基に、生活科の自己評価の方法が子ども一人一人が自らのように振り返りたいのかを意識できるようにしたり、子ども自らの発想から生まれた方法で行うことができるようにしたりするための教師の支援のあり方を明らかにしていきたいと考える。また、子どもの学習に対する意欲の向上は「自律性・関係性・有能観」の3資質がより高まることであり、そのための生活科学習の指導方法の改善や工夫が求められる。自立への基礎を目標とする生活科からその具体策を提言していきたい。

参考文献・引用文献

- 安彦忠彦 (1989) 「自己評価」図書文化
加納寛子 (1997) 「モーリス・ドベスの理論に基づく発達段階に応じた自己評価の果たす役割について」日本教育心理学会発表論文集第 39, 402.
モーリス・ドベス著 堀尾輝久・齋藤 佐和訳 (1982) 「発達の段階—誕生から青年期まで」岩波書店
小野間正巳・板倉信博 (2013) 「学びを豊かにするカリキュラムの創造—大学・地域との連携による授業づくり— 静岡大学教育実践総合センター紀要 第 20 号, 355-364.
小野間正巳 (2013) 「生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムについて」第 22 回日本生活科・総合的な学習学会全国大会発表要旨 明石高校
小野間正巳 (1993) 「生活科の評価基準表」北尾倫彦編集 評価基準表 図書文化
静岡大学教育学部附属浜松小学校 (1995) 自分をつくる 第一法規

Study on the Theory and Practice of Human Life, Enhance the Autonomy, Relationship and Capable —Teaching Based on Self Assessment Cards —

Retrospective activities and methods of work, attitude, motivation, in pace with their own criteria have experience self evaluation is for children in the lower grades, make sure you adjust said. However, later achieved continued, noticed his good and growth, not clear about the point of awareness of myself, evaluate how to deepen it and how to evaluate. How self-evaluation could deepen the quality awareness in the lives of set and point of view of the evaluation method and device, and validated through the practice and would like to clarify the set thought this issue. Between each stage represented write self evaluation card description and learning development of evaluation criteria and how to support and make it making use of support, such as talking to the children's activities as a clue. That make mutual evaluation confirm self evaluation and adjustments even more acts and autonomous learning of children are deployed, as well as among children relate, led to confidence in learning. Can be expected by using self assessment card was devised in this way, and increase the autonomy of life environment studies, relationships and talented leaders.